

## 『社会を明るくするために』

小城市立小中一貫校芦刈観瀾校 8年大島 悠斗

安全で安心して明るく生活できる社会、それはどのようにすれば実現できるのでしょうか。現在の世の中は、はっきり言って暗いことばかりです。例えば、いじめ、虐待、自殺などその原因は一体何なのでしょう。私はコミュニケーションの不足だと思います。そのコミュニケーションを増やすためにも挨拶などは有効だと思いますし、その挨拶は感謝しあったりして人の目をみて話したりするので、一つ一つが重要なことです。だけど、小学校のころ私は恥ずかしくてこのような挨拶はできませんでした。しかし、私は、挨拶を始めました。始めたきっかけは、犯罪の対策で挨拶を積極的におこなっているというのをみて挨拶というものが犯罪を減らせられることを知ったからです。また自分自身も犯罪というものが嫌でしたので、挨拶はあまり好きではありませんでしたが、少しでも努力してやっていこうと思いました。だけど、その挨拶が、犯罪を減らすことに効果がでているかどうかはわかりません。だけれどもこのようなちょっとした行動力が社会を明るくするんだらうなと私は考えました。挨拶というたった数秒のコミュニケーションだけど、積み重なれば世の中を明るくすることができます。だから、どうせなにも変わらないよみたいなことを思わずに積極的に挨拶してほしいなと思います。そうすれば、世の中は今よりも、もっと明るくなるはずですし、また私は身近なところから世の中を少しでも明るくするために少しずつ努力していきたいと思います。

先日、とある音楽を聴いていたの出来事、タイトルは井上陽水の「傘がない」だった。「都会では自殺する若者が増えている」とのモノローグの形で始まるこ

の作品を耳にして、私はふと今の世相に思いを巡らせてみた。

一つの物語に登場するのは、文中には出てこないが「僕」とそして「君」だけである。この「君」はガールフレンドかもしれないが、同時に「僕の言葉を聴いてくれる誰か」かもしれない。新聞の片隅に載っていた小さな記事と僕の間を少しばかりうがった物の見方で解釈するなら、もしかしてこの「僕」がこれから自殺する前に別れを告げに行く相手のことを暗に示しているのかもしれない。福井県の東尋坊は自殺の名所としてつとに知られているが、岬の突端よりも少し手前に一つの電話ボックスがあり、「もう一度だけ考え直してみて？」とのメッセージが記されているともいう。「いのちの電話」ともいう。「いのちの電話」と呼ばれるこの試みはイギリスで1953年に端を発する運動であり日本では1971年に始まるという。

当時のイギリスは経済不況下にあつて若者を含めての失業率が高く、自殺や犯罪の増加率に象徴される社会問題も多発していた。そんな中にあつて改めて見直されたのは直接に「人と人を結ぶ」コミュニケーションツールとしての電話だった。受話器の向こう側には黙って自分を受けとめてくれる人がいる、との安心感から相当数の人が救われ、救われた人が今度は人の言葉を聴く役回りに付くことで相互扶助の連鎖が生まれ「言葉が本来的に持つ可能性」が改めて見直された象徴的な出来事だった。現在でこそラインやツイッターといったデジタルメディアが従来のメディアに取って代わるかの様に普及した感がある。

しかし、手紙やメールは特定の相手に対しての遣り取りとはなるが、もしこれが見知らぬ人に対しての切っ掛けと考えるならばどうだろう。「いのちの電話」では一度の面識もない相手との遣り取りであり相手が不特定との意味から見れば、むしろアマチュア無線の呼びかけ言葉としての「CQ、CQ」にニュアンスは近いかもしれない。見知らぬ相手であっても呼びかければ聴いてる誰かが必

ず応援してくれる。こうした遣り取りは挨拶に近いとも考えられる。満員電車の中で両手に一杯の荷物を抱えたお年寄りがいたら、誰かが必ず席を譲る光景を目にする時、世の中まんざら捨てた物ではないなどのささやかな感慨もこうした言葉が具体的になった形から受ける印象かもしれない。「ありがとう」「ごめんなさい」「いいえ、お気になさらないでください」自然な言葉の遣り取りは何と心地の良い時間だろうと思ひ、自らもそうした機会に巡り会えたらと、僕は「言葉が醸し出す可能性」を信じたいと思ひます。